

『諸国民の富』の主題について

加茂川 益 郎

1. スミスの問題意識と課題

スミスは主著、『諸国民の富』の「第4編、経済学の諸体系」の冒頭で次のように述べている。「政治家または立法者の科学の一部門と考えられる経済学（political oeconomy）は、二つの別個の目的をたてているのであって、その第一は、人民に豊富な収入または生活資料を供給すること、つまりいっそう適切に言えば、人民が自分のためにこのような収入または生活資料を自分で調達しうるようにすることであり、第二は、国家すなわち共同社会（state or commonwealth）に、公共の職務を遂行するのに十分な収入を供給することである。経済学は、人民と主権者との双方を富ますことを意図しているのである¹⁾」と。みられるとおり、スミスは経済学をもって「人民と主権者との双方を富ますこと」を目的とする、「政治家または立法者の科学」すなわち政治的実践のためのpolitical oeconomyと考え、かつこの「富」の内容を「生活資料」と規定したのである。経済学を政治的実践＝政策のための科学とする考えはスミスに固有のものでない。そもそも経済学が政策と不可分離のものであって、政策的主張を主たる動機とする重商主義としてその形成の萌芽をみたことは周知のことであろう。しかし、「生活資料」をもって「富」と規定し、これをいかに富ますかを「意図」したところにスミス経済学の原点があり、課題がある。この点を、スミス自ら記した、『諸国民の富』の冒頭の「序論および本書の構想」によっ

て、より立ち入った考察を加えてみよう。

あらゆる国民の年々の労働は、その国民が年々に消費するいっさいの生活必需品および便益品を本源的に供給する元本（fund）であって、この必需品および便益品は、つねにその労働の直接の生産物か、またはその生産物で他の諸国民から購買されたもののいずれかである。²⁾

『諸国民の富』冒頭のこの文章は、スミスの問題意識と課題を象徴的に表現している。まず第一に、前述した「生活資料」としての富は「生活必需品および便益品」と規定され、第二に、労働はこれらを「本源的に供給する元本（fund）」であること、換言すればこれらはすべて労働の生産物であることが示され、第三に、これら「生活必需品および便益品」は「国民が年々に消費する」ものであるから、「年々の労働」によって生産されなければならないこと、すなわち再生産されなければならないことを示唆しているのである。

富を国民が消費する「生活必需品および便益品」に求めたスミスの考えは、スミス以前の重商主義やスミス以後のマルクスとも異なる。重商主義者は富を主要には金、銀としての貨幣に求め、これをいかに国内に蓄積するかを主要な課題とした。重金主義者はいうまでもなく貿易差額論者としてのトーマス・マン³⁾にしても究極的には、貿易差額によって金、銀としての貨幣の増大を目的としたのであった。これに対してマルクスはどうか、『資本論』冒頭の文はスミスに対してかなり異質である。

資本主義的生産様式の支配的である社会の富は、「巨大なる商品集積」として現われ、個々の商品はこの富の成素形態として現われる。したがって、われわれの研究は商品の分析をもって始まる。⁴⁾

マルクスは、「資本主義的生産様式の支配的である社会」では富が「商品」として現われると述べる。したがって、スミスのいう「生活資料」——「生活必需品および便益品」が富であることを否定しているのではない。「生活資料」ばかりでなく生産手段をも含めて、それらが商品という形態をとるところに「資本主義的生産様式の支配的に行われる社会」、いわゆる資本主義社会の形態的特性をみ、この資本主義経済の特殊歴史的性格を『資本論』の課題としたが故に、「商品の分析」をもって「研究」を「始める」と宣言したのである。もっとも、スミスもまた『諸国民の富』では、商品としての富を論じ、商品生産が全面化する資本主義社会を事実上研究対象としているのである。だが彼にとっては、富が商品として存在することは自明の事実的前提であり、富が「商品」として「現われる」こともあるし、また「商品」として「現われ」ないこともあるという、富と商品形態の連関に注意を向けることがなかったのである。この点に関するスミスとマルクスの相違がそれぞれの主著の書き出しの相違に見てとれるのである。彼らは等しく資本主義社会を対象にし、同様に商品の価値を論じ、賃銀、利潤、地代を論じながら、マルクスがそれらを商品生産の全面的に行われる社会に特有な経済的カテゴリーとして、したがってまた他の歴史社会と区別される資本主義社会の歴史的特性を明らかにするカテゴリーとしたのに対して、スミスにとっては、商品生産はあたかも人類社会に自然的必然的なものであり、それらのカテゴリーを一歴史社会に特有なものとは見なさなかったのであって、歴史的特性の解明それ自体は主題になりえなかったと理解することができよう。

いうまでもなく、「生活必需品および便益品」という使用価値としての富はいかなる歴史社会にも共通なものであるが、その「商品」としての「現われ」は商品経済にのみ特有なものである。しかしながらこの点についてのスミスの無関心こそ、商品経済的富としての貨幣に固執しその議論を主に流通過程に向けた重商主義とは異って、スミスをしていかなる社

会にも必須な人間生活の物質的基礎である使用価値的富の再生産という見地を引き出させたのである。使用価値的富（「生活必需品および便益品」）の「元本（fund）」としての「労働一般」⁵⁾の規定と「年々の」「労働」によるこれらの生産＝再生産という見地はスミスによって初めて得られたものである。もっとも、あらゆる社会の存立の物質的基礎たる社会的再生産過程の解明ということになれば、すでにその先達としてケネーの『経済表』による簡明な解説を上げることができるだろう。しかし、重農主義者としてのケネーは、農業労働だけが「純生産物」（produit net）を産み出す生産的なものと考えたのであって、「労働一般」の概念に到達したとはいえないのである。

このようにいかなる社会形態の人間生活にも必要な「生活必需品および便益品」＝使用価値的富の再生産過程の解明を通じて、資本主義社会がこれらの富をいかに増大させ、国民の生活をいかに富裕にさせるかを追究すること、これがスミスの課題である。

2. 労働生産力の発展と富裕の実現

スミスは上述の冒頭の引用文のすぐ後でつぎのように展開している。

それゆえ、この生産物またはそれで購買されたものが、それを消費すべき者の数に対する割合の大小に応じて、その国民は、必要とするいっさいの必需品および便益品を、十分にまたは不十分に供給されることになるであろう。

しかしこの割合は、どのような国民のばあいにも二つの異なる事情、すなわち第一に、その労働が一般に充用されるばあいの熟練・技巧および判断（skill, dextertity and judgement）、また第二に、有用な労働に従事する者の数とそういう労働に従事しない者の数との割合、によって規

定されざるをえない。ある特定の国民の領土の地味・気候および大きさがおよそどのようなものであろうとも、その国民の年々の供給が潤沢かまたは乏しいかは、その特定の事態のもとでは、これら二つの事情に依存せざるをえないのである。⁶⁾

スミスはまず、国民の富裕は消費人口と生産される「必需品および便益品」の量の割合によって規定されると述べ、ついでこの割合が、「第一」に「その労働が一般に充用されるばあいの熟練・技巧および判断」によって、「第二」に「有用な労働に従事する者の数とそういう労働に従事しない者の数との割合」によって規定されるという。

国民の富裕化を達成する「第一」の原因として上げられた労働の「熟練・技巧および判断」は労働生産力の増進をもたらすものとして、「生産物が社会のさまざまな階級や境遇の人々のあいだに自然に分配される秩序」の考察と共に「第一編の主題をなす」ものである。ではこの「第一」の原因と「第二」の原因はどのように関連させられているのであろうか。スミスは「その（労働のこと……筆者注）熟練・技巧および判断の実状がおよそどのようなものであろうとも」⁷⁾、「この状態が存続するかぎり」、国民の富裕度は「有用な労働に年々従事する者の数とそういう労働に従事しない者の数との割合に依存せざるをえない」と述べているのであって、要するに労働の「熟練技巧および判断」という労働生産力の水準を所与のものとすれば、生産物の量は「有用で生産的な労働者の数」によって規定されると考えているのである。すなわち、「第一」の原因はいわば労働生産力の質的な規定をなし、「第二」の原因はこの一定の労働生産力の水準の下で労働生産物の量を増大させるいわば労働生産力の量的規定をなすのみならず⁸⁾としてよいであろう。そしてこの「有用で生産的労働者の数」＝「就業」労働者数は「資本的資財（capital stock）の量」と「資本的資財」が「使用される特定の方法」とに「比例するもの」として、すなわち一般に資本蓄積に

よって規定されるものとして第2編で論じられる。

ところで、「労働の生産諸力における最大の改善」と共に、「それをあらゆる方面にふりむけたり，充用したりする」ものとしてこの労働の「熟練・技巧および判断」は「分業の結果」とみなされる。換言すれば分業こそ労働生産力を増進させる主因と考えられるのである。スミスは『諸国民の富』の「第1編第1章 分業について」で，ピン製造の場合を例にとって分業が生産量をいかに増大させるかを実証し，さらに何故に分業が生産量の増大をもたらすかを三つの理由⁹⁾によって説明している。しかし，そのさいにスミスは工場内の分業と職業あるいは仕事の分化としての社会的分業を質的に区別せず，いずれも生産力の増進という観点から同一視し，混同している。

このように分業にもとづく労働生産力の増進を規定したあと，スミスは専ら社会的分業を商品交換と関連づけて論じていくことになる。第2章で，分業は「人間の本性のなかにある」「交換性向」に起因し，交換によって利益をえることができるという個人の「自愛心 (self-love)」と結合して実現されるものと考え，続く第3章では，この社会的分業＝商品交換は「市場の広さによって制限される」として，都市や水運の便による市場の拡大をあげ，やがて「分業が徹底して確立され」て「あらゆる人」が「交換することによって生活」する「商業社会」が形成される（第4章）。そして第5章以後では，この「商業社会」に資本主義社会が重ね合わせられ，商品の価値が論じられ，その分配形態としての賃銀，利潤，地代が考察されることになる。

ところで，上述のスミス分業論について特に問題とされなければならないのは，工場内分業であれ，社会的分業であれ，それらを形成，促進する要因としての社会経済的要因が軽視されている点¹⁰⁾である。スミスがあげた工場内分業の例であるピン製造は，資本主義生成期における産業資本の生産方法としてのマニファクチャーであり，またスミスが述べた「分業に

由来する」「機械類の発明」も——そして確かに技術的にみれば、分業の発展が機械の発明に道を開くものであるが——資本による利潤の観点からする機械の採用という動力を無視しえない。社会的分業＝商品交換¹¹⁾にしても、上述したごとく、その起源を人間の性向に求めたり、またその発展を地理的要因に求めたりする方法では、社会的分業＝商品交換の全面化したスミスのいわゆる「商業社会」の形成を説くことができない。スミスのいう「商業社会」は商品生産、商品経済として、15世紀末以降の地理上の発見にともなう貿易路の転換による商業革命＝世界市場の成立と、それを契機とした国内における封建的諸関係の解体によって促進され逆にまたその解体をも押し進めた資本による商品生産——それが商人資本によって支配されるものであれ、産業資本のマニュファクチャーによるものであれ——として発展したものである。資本による生産の社会的浸透こそが、従来同一の生産者によって行なわれていた諸産業を独立の産業に分化させ、他方では工場内分業を促進し、かつこれによって分離された生産の諸工程を独立した産業に転化させ社会的分業を益々発展させたのである。¹²⁾すなわち、スミスがここで問題にしている、事実上近代における労働生産力の発展と社会的分業の広がりとは資本家的生産方法と資本家的商品経済の展開のうちに実現されたものであって、単に一般的な労働生産力の増進、分業の発展に解消されるべきものではない。端的に言って、スミスは、近代における労働生産力の発展が資本の生産力として現われ実現されることを認識しておらず、したがってその転倒的性格に思い至らない。先にあげたスミスのピン製造はいわゆるマニュファクチャー分業＝工場手工業的分業であるが、これについてマルクスはつぎのように述べている。

工場手工業的分業は、手工業的活動の分解、労働用具の特殊化、部分労働者の形成、一つの全体機構における彼らの配列と結合によって社会的生産過程の質的編成と量的均衡を、したがって社会的労働の一定の組

織を作り出し、またそれと同時に労働の新たな社会的な生産力を発展させる。社会的再生産過程の特殊資本主義的形態としては——そして既存の基礎の上では、それは資本主義的形態においてしか発展しえなかった——工場手工業的分業は相対的剰余価値を産み出すための、あるいは資本——社会的富、「諸国民の富」等と名づけられるもの——の自己増殖を労働者の犠牲において高めるための、特殊な一方法にすぎない。それは労働の社会的生産力を、労働者のためではなく資本家のために発展させるのみならず、個別労働者の不具化によって発展させる。それは労働にたいする資本の支配の新たな諸条件を生産する。したがって、それは、一方では、社会の経済形成過程における歴史的進歩と必然的発展契機として現われるとしても、他方では文明化され洗練された搾取の一手段として現われるのである。¹³⁾

マルクスは「労働の社会的生産力」の新たな発展としての工場手工業的分業は、「一方では、社会の経済的形成過程における歴史的契機と必然的発展契機」ととらえながら、「他方では」「資本主義的形態においてしか発展しえなかった」「資本の自己増殖」のための「特殊の一方法」であり、「文明化され洗練された搾取の一手段」とみなしている。さらにスミスが称揚する「諸国民の富」を冷たく「資本」と規定している。マルクスはまた、「資本」による「労働の社会的生産力」の発展は「個別労働者の不具化」、「労働者の犠牲」、「労働者にたいする資本」の「新たな」「支配」をもたらすものと批判的に考察している。これにたいしてスミスは、「第二の階級の利益、つまり賃銀によって生活する人々のそれ」¹⁴⁾すなわち労働者階級の利害は、「社会の利害」¹⁵⁾(=国富の一般的増進)と「むすびついて」¹⁶⁾相即的に進行すると、きわめて楽観的、肯定的な結論を下しているのである。

さて、第1編で分業による労働生産力の発展にもとづく富裕化を説いた

のち、スミスは第2編でこれを増幅するものとしての有用な生産的労働者数の増大を資本の蓄積として展開する。この点を、「第3章、資本の蓄積について、すなわち、生産的および不生産的労働について」に依って示せばつぎのようになるだろう。¹⁷⁾「資本を回収する部分」によって「生産的な人手」が「扶養」され、したがって生産的労働者が維持され、資本の「収入」のなかから「節儉 (parsimony)」によって「貯蓄」されたものによって「生産的な人手の追加量」が「扶養」され、これが「資本増加」とみなされる。要するに、スミスは、資本蓄積を剰余価値の労働力商品としての可変資本への転化（生産手段としての不変資本への転化は欠落）としてとらえ、この元本は資本家の個人的な「節儉」によって作り出されると考えるのである。

いうまでもないことだが、資本の蓄積が必ずしも就業労働者人口の増大に結びつかないことは、資本構成の高度化による蓄積が短期的には相対的過剰人口の形成をもたらすことをみても明らかであろうし、また資本蓄積を、浪費を押えて貯蓄する人間の「節儉」性向によって主張するのは、資本主義的生産様式に必然的な客観的なものとして資本蓄積を明らかにすることにはならない。資本蓄積はより多くの剰余価値をえようとする資本の本性に根ざし、他方で資本による労働生産力の発展が剰余価値のうち、資本家が個人的に消費する部分を減少させその結果蓄積元本を確保、増大させるという点から論証されなければならない。

ここでも、スミスは資本蓄積を資本に特有なものとして考察する視点が弱いのであるが、ともかくも、『諸国民の富』の冒頭において、富を「生活必需品および便益品」に求めたのに対応して、資本の「目標」を「直接の消費のために留保される資財」を「維持し増大すること」として、資本蓄積は生産的労働者の増大によってこれを達成すると考えたのである。

以上、第1, 2編の概略的な検討を通じて、資本主義的生産が労働生産力の発展による国富の増加によって社会の一般的富裕を達成し、労働者も

その恩恵にあずかるというスミスの見解をみてきたのであるが、この点に関して、今一つスミスの文を引用してみよう。

文明で盛大な諸国民のあいだでは、たとえ人民の多数はまったく労働せず、その多くは働く人々の大部分にくらべて十倍、否しばしば百倍もの労働生産物を消費するにもかかわらず、社会の全労働の生産物はなおきわめて大であるから、すべての人はしばしば潤沢に供給され、最下貧層の階級の職人でさえ、もしかれば儉約で勤勉であるならば、どのような野蛮人が獲得しうるよりも多くの生活必需品および便益品の分け前を享受しうるほどである。¹⁸⁾

ここでスミスがいう「文明で盛大な諸国民」とは事実上、資本主義社会の国民とみなしていいであろう。そうすると、スミスは明らかに、資本主義社会において「まったく」労働しない「多数」の人々が「働く人々」の「百倍もの労働生産物」を受け取るという、不合理、不平等を認識している。にもかかわらず、労働生産力の増大による多量の生産物は「働く人々」にたいして「多くの生活必需品および便益品の分け前を享受」させようと考えているのであって、それは一方では階級社会に基因する分配の不合理、不平等を鋭く認識しながらも、他方では享受しうる「分け前」の絶対的増大がもたらす富裕によって、この不合理、不平等を許容しうるものとして究極的にはこの社会の肯定的認識を示しているといえるだろう。

むすび

スミスは、資本主義社会が、労働生産力の著しい発展によって国富を増進させ、国民の富裕を達成すると考えたのであって、その生産様式の特殊歴史的形態の特性とそれが及ぼす影響は軽視したのである。これに対して

マルクスは、資本主義社会における労働生産力の飛躍的發展を資本の文明化作用として評価しつつもそれは未来社会の物質的基礎としての面であって、現実の資本の生産過程は資本の剰余価値の取得による価値増殖過程として資本と労働の対立する関係においてとらえ、資本蓄積の進展がやがて産業予備軍の絶対的増大をとおして労働者の資本家に対する闘争を激化させるとの認識²⁰⁾を示したのである。

このようなスミスとマルクスにおける資本主義認識の差は、産業革命が緒につき生産力の急速な上昇が明るい未来を予想させたような時代に生きた者と、すでにイギリスにおいて資本主義が確立し周期的恐慌が発生し資本と労働との現実的対立が鮮明になっていた時代に生きた者との差に由来するともいいうるであろう。にもかかわらず、資本主義社会における労働生産力の増進による一般的富裕の増進が分配における不合理、不平等を事実上消極化させるとするスミスの予知的認識はマルクスの見解と対比しても依然として今日の問題を提出している。²¹⁾

だがこの小稿では、スミスが富の本質をはじめて労働一般に求め、この労働の生産力という視点から、資本蓄積のうちにあらゆる社会の物質的基礎である富（生産手段はしばしば無視されたが）の社会的再生産過程を説明しようとしたことは、その種々の理論的限界にもかかわらず高く評価されなければならない。しかしながら、その反面として資本主義的生産の特殊歴史的形態が軽視され、その点でマルクスと著しい対称をなしたことを同時に確認できればよい。

注 1) An inquiry into the nature and causes of the Wealth of Nations.;『諸国民の富』（大内兵衛・松川七郎訳 1959年初版）（三），p.5

2) 上掲訳本（一），p.89。但し，上記引用文では訳本中の「資源」は「元本」として記されている。内容からしてその方がより適切だと考えたからである。また，大内・松川両氏による岩波書店の二巻本の訳書（1969年初版）ではこのところがやはり「元本」と改訳されている。

- 3) トーマス・マン (Thomas Mun) は『外国貿易によるイングランドの財宝』(England's Treasure by Foreign Trade) で、貿易取引における商品の売買が貨幣を増殖する点から、「商品をもつものは貨幣にこと欠かぬ」として部分的には、貨幣との関連においてであるが商品を富と認める見解を示している。渡辺源次郎訳、東大出版会、1965年初版、p.35参照
- 4) Marx, "Das Kapital."『資本論』(一)、向坂逸郎訳、岩波文庫 S.44年初版、p.67
- 5) マルクスは、「富をうむ活動のどんな規定性をもすて去ったのはアダム・スミスの巨大な進歩であった」としてスミスによってはじめて「労働一般」の「カテゴリー」が発見されたと述べている。そしてこの「労働一般」は労働の「豊富な具体的発展」によってえられた抽象であるばかりでなく、「個人がたやすくひとつの労働からほかの労働にうつっていき、しかも一定種類の労働が、個人にとって偶然であり、したがって無関心であるような一つの社会形態に照応」し、「労働はここでただカテゴリーにおいてだけではなく、実際においても、手段としては富一般を創造するものとなっている」と指摘している。Karl Marx, "Zur Kritik der politischen Ökonomie" 武田他訳『経済学批判』岩波文庫 S.31年初版、p.317~318
- 6) 『諸国民の富』、前掲訳書、p.90
- 7) 同上、p.92
- 8) 内田義彦氏も同様な認識をしておられる。内田義彦、「スミス『国富論』体系」、『経済学史講座1』(有斐閣、S.39年初版)に所収。そのp.113~114参照
- 9) スミスは「第一に、あらゆる個々の職人の技巧の増進、第二にある種の仕事からもう一つの仕事へ移るばあいふつうには失われる時間の節約、そして最後に、労働を促進し、また短縮し、しかも一人で多数人の仕事をなしうるようにするところの、多数の機械の発明に由来する」という三つの理由をあげている。前掲訳書、p.105
- 10) もっともスミスは分業を人間の単なる交換性向や自愛心によって説いているのではなく、例えば「自分自身の労働の生産物の余剰部分のなかで、自分自身の消費をこえあまりあるもの」の存在を客観的要因とみなしている。しかし、これはあまりにも一般的であって、ここにおける社会的分業、商品交換の発展を説明し切れるものではない。同上書 p.120及びp.133を参照
- 11) ここでの「社会的分業=商品交換」という表現は、もちろん一般的に社会的分業は商品交換を意味することを指示しているのではなく、スミスにおいてはそうであることを指示しているのである。

『諸国民の富』の主題について

- 12) この点に関しては、マルクス『資本論』、前掲訳書（二）のp.209を参照されたい。
- 13) 同上書（二）のp.316～p.317
- 14), 15), 16) スミス『諸国民の富』、前掲訳書（二）のp.218。
- 17) 以下の解釈は、時永淑『経済学史』〔改訂増補版〕のp.258～259を参考。
- 18) スミス『諸国民の富』前掲訳書（一）のp.91。
- 19) この点について、『国富論草稿』の検討をも含めて突っこんだ説明をしているのは、内田義彦『経済学の生誕』（未来社、増補版）の「後編，1，『国富論』における市民社会の概念と分析」である。参照されたい。
- 20) 周知のように、マルクスはこれを「資本主義的蓄積の一般的法則」として展開している。マルクス『資本論』の「第7編第23章，資本主義的蓄積の一般的法則」，前掲訳書（三）のp.178以下。
- 21) 特に今日の先進資本主義国においては、労働の生産力の発展による一定程度の富の分配がいわゆる「中流意識」をもたらす消費生活を可能にさせ、他方で社会政策等によって「福祉国家」が志向されてくる時、スミスの認識は現実感を与える。また株式会社形式の普及によって喧伝される所有と経営の分離，所得格差の縮小に関する意識は資本主義の弁護論に論拠を与えることになる。他方での「社会主義」の現実と対比されるとき，資本主義の原理的認識の再検討とそれを踏えた現代資本主義の解明が必要とされよう。